フランスにおけるポオ評価の展望

江　口　裕　子

エドガア・ポオが1849年に世を去って以来，彼の評価に関しては，毀誉褒貶の両極にわたって数知れぬ書物や論文が世界各国のポオ学者や批評家によって書かれた。今日でも尚ポオの作品の編纂，伝記，評論，学位論文，材源研究など大小さまざまの著述が陸続と現われている。雑録的なものはおびただしい数に上るが，五十年百年後まで価値を失わぬような本格的な研究は決して多いとはいえない。その中でも注目されてよいものに，最近（1968）惜しくも物故したポオ学の権威マボット T. O. Mabbott 教授の1924年以来の念願であった，ハリソン版「ポオ全集」に匹敵するか，あるいは恐らくそれを凌ぐかと期待される，ハーバード大学刊の *Collected Works of Edgar Allan Poe* がある。またヴァージニア大学の Poe Professor, ストヴァル Floyd Stovall 教授編の *The Poems of E. A. Poe*（1965）と同教授の長年にわたるポオ研究を一書に編んだ *Edgar Poe the Poet*（1969）がある。また綜合的な文献書目も久しく望まれていたものだが，最近，1827年から現代にいたるまでのポオに関する著述を蒐集網羅した大がかりな文献書目の企画が，ダメロン J. L. Dameron 教授の手によって進められている。これらの出版物や企画は，前記のハリソン版「ポオ全集」(1902)の刊行，クイン A. Quinn 教授の「ポオ評伝」(1940)，オストロム John Ostromの「ポオ書簡集」(1948)等の記念すべき労作のあとを受けついで，アメリカにおけるポオ研究史を一歩前進させる業績と見なされるであろう。それにも拘らず，今世紀前半のアメリカにおけるポオ研究は比較的低調であって，マティーセン O. Matthiessen の名著 *American Renaissance* にもポオは全く言及されていないし，今日アメリカの代表的な作家と見なされるホーソーン，エマーソン，メルヴィル，ホィットマン，トウェイン，ジェームズに比べれば，ポオの権威ある研究はまだ貧弱といわざるをえない。今だにポオは本国の文学伝統に定着することも，真価を理解することも困難なエニグマ的体質をもった作家であるという観方は依然としてアメリカに存在しているのである。これにはポオが生きていた頃から英米圏のかなり著名な作家や批評家がポオにあたえてきた酷評が影響していることは確かである。

ポオと同時代のエマーソンの "Jingle man" という侮蔑的な言葉，ローウェルの「五分の三は天才なれど，五分の二はざれ言なり」という揶揄的な文句からはじまって，ジェーム

ズの "With all due respect to the very original genius of the author of the Tales of Mistery, it seems to us that to take him with more than a certain degree of seriousness is to lack seriousness one's self. An enthusiasm for Poe is the mark of a decidedly primitive state of reflection."[1] またエリオットの "That Poe had a powerful intellect is undeniable; but it seems to me the intellect of a highly gifted young person before puberty...a man of very exceptional mind and sensibility, whose emotional development has been in some respect arrested at an early age."[2] あるいは又ハックスレーの "The substance of Poe is refined; it is his form that is vulgar. He is, as it were, one of Nature's Gentlemen, unhappily cursed with incorrigible bad taste."[3] というような英米文壇の大御所から蒙った不評は，ヨーロッパの国々がポオにあたえてきた栄光をかげらせ，ポオの地位を動揺させるのに十分な影響力があったにちがいない。またブルックス C. Brooks とウオレン R. P. Warren 共編の，アメリカの大学の標準的なテキストとして定評のある *Understanding Fiction* は改訂版では削除されたものの，その中で「アッシャア館の崩壊」を文例にとりあげての酷評は有名であるし，さらには又，"This is an art to delight the soul of a servant girl; it is a matter of astonishment that mature men can be found to take this kind of thing seriously."[4] と評したウィンターズ I. Winters は現存の批評家のなかで，ポオへの風当りのつよい批評家の代表格である。このようにポオは英語を話す国の人々からは，侮蔑や敵意さえ感じられるていの評価をうけている。そしてエリオットにせよハックスレーにせよ，フランスの詩人たちのポオにたいする過大な評価は，英語や作詩法についての理解の不足している所からくるという切札を示して，ポオのフランス的評価を否認するのに十分な自信をもっているように思われる。ハーバード大学教授であった故ペリー・ミラー Perry Miller 氏は 1949 年，オランダの小都市を訪ねた折，たまたまその年がポオの百年忌にあたる年であったので，その町ではポオの記念祭をもよおし，文学とは縁のなさそうに見える政府の高官，銀行家，弁護士たちも参加して，ポオへの献辞や詩の朗読が行なわれた。ミラー氏はお茶の時間に，「お国ではポオの命日にあたる十月七日にはどんなことをなさっているのですか」という質問をうけて返答に窮したという。フランスならばまだしも，オランダのような小国でこのようなポオへの敬愛の実情をまのあたり見せられたことは，教授を困惑させるのに十分だった。そして，これらに対するミラー氏の見解は「彼らが崇拝して，わたしも賞めるだろうと期待しているポオは，フランス人の想像が作りあげた神話的存在にすぎない」[5] ということなのである。私はこのほほえましいエピソードを読んだとき，かつてハーバード大学で私の質問をうけたときの故ミラー氏の茫洋とした，童児めいた大陸的風貌と，

Eureka については "simply absurd" と一言で片づけられたときの会話を想い出さずにおれなかった。前述のエピソードと思い合わせると，恐らくミラー氏もポオに関しては，代表的なアメリカ人のポオ観をもっておられたのだろうと思う。

このようなアメリカの風潮に対して，ヨーロッパの諸国，なかんずくフランスではボオドレール以来ポオはほとんど自国の作家と同様に取り扱われ，今日フランスで出版されている世界の古典的作家の叢書，文庫本のリストを調べても，ポオは英米作家のなかで，おそらくその筆頭にあげられるであろう。古きはシェークスピア，新しい所ではヘミングウェイ，フォークナーの名があれば，ポオは必らずその叢書のリストに加えられているし，これらの作家がなくてもポオの名は見いだされるのである。まさしくポオはフランスの古典的作家なみの扱いを受けており，フランスの読者は昔も今もそれを抵抗なしに自然なこととして受け入れているようである。

このように百五十年の長きにわたって，今尚ポオの評価をめぐる論議はつきることがないが，これを全体としてながめれば，今世紀の初めまで彼をアメリカの文学の伝統のなかに位置づけることも，一流の作家として格づけすることも拒んできた英米圏の批評の大勢と，ボオドレール以来一貫してポオに敬愛と友好的態度を示し，今日ポオを世界的な地位に押し進めるのに主導的な役割をはたしたフランス圏批評の陰然たる勢力とに二分されるといってよい。こうした事実の背後に，単にポオという作家に対する個人的好悪の問題にとどまらず，より原理的な文学そのものの目的や機能に関する観方のちがい，人間や人生に対する関心の角度のちがい，さらに各々の関心の特色を生みだす国民的な体質，一国の精神文化のなかで芸術乃至文学が占めている比重などという，一そう普遍的な根本問題が横たわっている。そうなると私どもの研究的視野は，ポオという厄介なエニグマ的作家を要めとした比較文化の領域に迄押しひろげてゆかねばならぬ必要がある。とにかく，フランスではボオドレール，マラルメ，ヴァレリーという世界的な三詩人がヨーロッパの近代文学の中でもっとも重要な役割をつとめたフランス文学伝統である象徴主義の啓蒙的な師匠として範を仰いだのがポオであったという歴史的事実にかんがみて，では英米の作家や批評家がポオのなかに見いだしえなかったどんなものを彼らが見いだしたのかという疑問は，この融合調和の困難な批評の対立を前において，ポオ研究者が誰しも抱く疑問であろう。

T. S. エリオットは1948年に，彼自身負う所の大きかったこれら三大詩人とポオとの関係を分析し，彼自身はこの時点ではフランス的見解に同調しえないながら，もしこれらのフランス人たちの立場に立ってポオを見た場合，より綜合的なポオの作品の意義が明らかになるであろう可能性を示唆して次のような言葉を残した。

We all of us like to believe that we understand our own poets better than

any foreigner can do; but I think we should be prepared to entertain the possibility that these Frenchmen have seen something in Poe that English-speaking readers have missed[6].

ポオを現代的なより巨視的な観点に立って正しい姿でとらえるためには，英米圏の批評のみに頼って論ずることも，フランス圏の見解を一方的に支持することをも避け，ポオ評価の歴史的な対立の原点に立ちもどって検討し直す必要があると思われる。

*　　*　　*　　*

ポオの近代のフランスの文学伝統に及ぼした影響とその意義については，すでに多くの学者や批評家によって検討されつくした感があるが，ここではポオの紹介に心血を注いだボオドレール以後二十世紀の初頭までのフランスにおけるポオの評価がどのような歩みを辿ったかを概観してみたい。

ボオドレールの翻訳および伝記的評論がフランスにおけるポオ評価のいしずえとなったのは周知の事実であるが，ポオの作品のなかに来るべき時代の文学の方向と方法とを告げ知らせる新しい知的価値を発見し，これを吸収しようとしたのはまず創造的活動にたずさわる文学者たちであり，学者や批評家は必ずしもポオの意義を認めるのに敏ではなかった。従ってフランスにおけるポオ評価の歴史で重要な役割を演じているのは，ボオドレール，マラルメ，ヴァレリーを三頂点とする浪漫派，高踏派，象徴派の系譜にぞくする文人たちである。このことは同時代のアメリカで，文人にしてポオに私淑するものなく，文人批評家こぞってポオに背を向けた事情とはおどろくべき対照をなしている。アメリカで出版された最初のポオ著作集 *The Works of the Late Edgar Allan Poe* (1850) が，歪曲と誹謗で悪名の高いグリズウォルド R. W. Griswold の序文 "Memoire" によって世に紹介され，他方フランスでは，ボオドレールの最初の翻訳，「意想外の物語」*Histoires extraordinaires*(1856) が過大な同情と擁護にみちた訳者の序文によって読者の注目を一挙にあつめたという二つの事実は，それ以後の両国間の評価の対立の歴史にたいして象徴的な意味をおびている。ポオがそれほど抵抗なくフランスの国民の間に浸透したのは，浪漫主義がようやく退潮の萌しを見せはじめた1840年代以後，新しい時代の指針を求めていたフランスの文学的要望に合致したからであり，訳者ボオドレールは，時代を代表するすぐれた感受性であり，頭脳であって，当時の浪漫主義から一歩脱却した，そして本来フランス人にアッピールするようなポオの素質と傾向——詩的感性と批評的知性の稀れな結合，美学論へのつよい関心，表現効果への意識的な模索——をいち早く把握する高感度の受信器の役割をつとめ，ほとんど彼自身の創造といえるほど流暢な，含蓄の深い翻訳によってポオの精髄を伝達したことによるのである。また一方，ボオドレールは，彼のいう所の＜精神的雙生児＞との遭遇によって触発され，自己

を発見し，深化させ，ポオの思想体系を継承発展させるよりも，これを遵奉し実践することによって，独創的天分を開花させることができた。十九世紀末のフランス詩歌の革命に火を点じたボオドレールによるポオの発見がなければ，ヨーロッパにおけるポオの声価は今日の如くはならなかったであろう。

フランスにおけるポオの最初の翻訳は1845年，*La Revue britannique* に載ったアルフォンス・ボルゲール Alphonse Borghers 訳「こがね虫」*Le Scarabée d'or* であり，これは編集者によって原作者ポオの名が紹介されていた。ボオドレールがポオを発見したのは彼自身の言によれば，1846年か1847年のことであり，確実な日附は不明であるが，彼の伝記作者シャルル・アスリノー Charles Asselineau や，レオン・ルモンニエ Léon Lemonnier の説に従って，ムーニェ夫人 Isabelle Meunier の「黒猫」*Le Chat noir*（1847）の仏訳によって初めてポオの作品に接したと考えるのが妥当であろう。しかし，それ以前にポオの名がフランスで知られるようになったのは，彼の作品の剽窃をめぐる一つの訴訟事件によってである。1846年六月十一日から十三日にかけてパリ市の新聞 *La Quotidienne* に G. B. という署名で *Un Meurtre sans exemple dans les Fastes de la Justice* という題名の物語が載った。ところが同じ年の十月十二日 *Le Commerce* 新聞に Old Nick という署名で *Une sanglante Enigme* という名の物語が現われた。Old Nick とは，当時のジャーナリストで，英米の新しい作品を探しだすのに敏なエミール・フォルグ Emile Forgues のペンネームであった。これらの物語は実は二つともポオの「モルグ街の殺人」の翻案であった。二日後にかねがね別の剽窃の件でフォルグに怨みのあった *La Press* 新聞は，フォルグの物語は *La Quotidienne* に掲載された物語の剽窃であるという告発記事をかかげた。これをきっかけとして，フォルグと *La Press* 新聞との間の論争は訴訟事件にまで発展し，結局はフォルグの敗訴に終ったのであるが，たまたまこの事件のおかげで，原作者ポオの名前は広くフランスの翻訳家や読者の間に知られることになった。ボオドレールの注目をひいたのもこの頃からであろう。

エミール・フォルグはフランスで最初にポオの批評を書いた人であり，1846年十月 *Revue des Deux Mondes* に *Etudes sur le roman anglais et américain* と題する評論を寄せて，Wiley and Putnam 版の「ポオ作品集」*Tales by Edgar Allan Poe*（1845）にたいする批評と解説をこころみた。フォルグはラプラースの *L'Essai philosophique sur les Probabilités* から説きおこして，ポオをラプラースに似た高度な知性の持主であり，彼の創造活動を支配する原則は強力な論理性であることを指摘している。小説や劇において，論理は行為のかくれた枢軸になるもので，無数のディテイルの下におおいかくされているが，この両者を切り離してみると，案外論旨やプロットは貧弱なものであることが多い。が，ポオ

の作品では，いかに神秘的でファンタスティックな外観に装われていても，論理がすべてを支配し優先する。"…la logique est à nu; elle domine tout, elle est reine et maîtresse. Son office n'est plus d'étayer, charpante inaperçue, un monument aux riches dehors; elle est elle-même ce monument, qui n'emprunte rien ou presque rien aux autres ressources de l'art. Elle ne joue plus le rôle de l'esclave soumis qui prête son époule robuste à son maître chancelant sous le vin, et le conduit, non sans peine, à quelque porte mal entrevue; elle marche seule, forte de sa propre force; elle est le but et le moyen, elle est la cause et l'effet."[7]

フォルグは，ポオが彼一流の本能的な明智によって＜蓋然性＞ probability の領域に挑み，大胆な考察をこころみた作家であると見なして，この＜蓋然性＞の実験ともいうべき物語，「モノスとユナ」，「エイロスとチャーミオン」，「催眠術の啓示」などを興味をもって分析している。自分自身の肉体が静かに崩壊してゆく過程を霊妙な第六感によって知覚する死後の人間存在の想定，また彗星の近接，それに伴なう大気中の酸素の異常な増加，ついで不可抗の自然発火による地球の絶滅，これらの哲学者も科学者もあえて解明をあたえ得ない死の神秘，地球の運命についての大胆きわまる＜蓋然性＞の物語に，読者をひきつけずにおかぬ真実性をあたえているものは，ポオの強力な論理性である。フォルグはまたポオの短篇小説の意義を高く評価し，冗長な過去の小説群に比べて，ポオの凝縮された，簡潔でむだのない表現のなかに独創的な意想をつくした物語形式こそ，次代の読者にアッピールするものになろうとのべている点は，近代の短篇小説の普及を見越した一家言であると思われる。

フォルグの評論は，このようにポオの論理的な明証性を高く評価している一方，彼の詩的想像力について殆ど言及せず，この点に関しては，"inventeur de fantasies sans but", "caprices purement littéraires" と軽く片づけているのは，ポオの理解に片手落な所があるという感を免がれないし，純想像的な作品として「黒猫」と「群集の人」を解説しながら，「アッシャア館の崩壊」を全く除外しているのは理解に苦しむ点である。このことから次のような事情は推測できる。フォルグが批評のテキストとして取上げたのは Wiley and Putnam 版の作品集であるが，この初版本の選者であった E. Duyckinck が読者への反響をあてこんだのであろうが，ポオの意図に反して選んだ十二の物語は，アラベスクな物語よりも「こがね虫」，「モルグ街の殺人」，「マリー・ロジェ」，「ぬすまれた手紙」，「催眠術の啓示」等の推理的な物語が優先的にえらばれているという詮衡の仕方にもよるのであろうし，フォルグはこの作品集のほかはあまり読んでいなかったらしいことが分る。しかしフォルグの強調したポオの特質が，理論好きなフランス人たちのポオへの関心を惹きおこすのにあずかって力があったとは十分推量できることである。フォルグの評論に関して今一つ不可解な点は

「マリー・ロジェ」より有名な作品である「モルグ街の殺人」について，フォルグが全く言及をさけている点であるが，これはこの批評が発表された直後に（1846年十月十二日），前述の訴訟事件に発展した彼の「モルグ街」の翻案が紙上に載ったことを考え合わせると，フォルグがこの作品を批評のリストから外している理由が納得できるであろう。

ボルゲール，ムーニェ夫人，フォルグ等はそれぞれ翻訳または批評によって，ポオをフランスに紹介した歴史的意義によって記憶されるべき人々であるが，ポオをフランスの作家の仲間入りさせたのは何といってもボオドレールの功績である。彼が最初に手がけた翻訳は「催眠術の啓示」*Révération magnétique*（1848）であり，彼はこの訳文に短かい序文を附けている。この序文におけるポオの取扱かいははなはだ簡単なもので，ポオはすぐれた素質をもつ他の数名の作家のリストに加えられて，凡庸の作家から彼らを区別する哲学的精神，人を驚かせるに足る独創性，固有の方法をもった文学者の一人として，ひとしなみに扱われているに過ぎず，この時点におけるボオドレールの関心はまだ初歩的なものであったとしか考えられない。1852年，*Revue de Paris* に発表された最初の「ポオ論」*Edgar Poe, sa vie et ses ouvrages* との間には，ポオへの認識の程度に格段の差がみとめられる。このことは彼がポオに心を惹かれて以来，ポオの作品を読むためにひたすら英語の研鑽を重ねるかたわら，ポオが編集者をしていた時期の *Southern Literary Messenger* をあつめたり，ポオの作品や伝記について出来るだけ多くの資料と情報をうるために努力したことを物がたっている。ボオドレールは最初の作品集「意想外の物語」，及び第二の作品集「新意想外の物語」*Nouvelles histoires extraordinaires*（1857）を矢つぎ早に世に送って以来，彼の死の二年前まで十七年の長きにわたって，ポオ作品の翻訳に打ちこんだ。この翻訳たるや，クレペ版のボオドレール全集十九巻のうち五巻の分量を占めている。彼ほどの創造的天分をもった文学者がこれほど長年の間，いわば第二義的な翻訳仕事に心血を注いだということは，文学者の生涯として特筆に値いすることであり，ボオドレールの精神史のなかでポオの存在がいかに重要な位置をしめていたかを物語っている。彼は晩年に近く，「毎朝，あらゆる正義の源たる神に，また仲介者として，私の父に，マリエットに，そしてポオに祈りをささげること」（<火箭>）という言葉を残しているが，ポオの訳業の成就をねがうことは，彼にとってはほとんど敬虔な祈りにさえなっていたのであろう。これらの事実を想い合わせると，ポオがボオドレールにあたえた啓示は，二つの創造的精神の間におこったたぐい稀れな感応現象の一例であって，このようなポオへの傾倒から生まれたボオドレールの翻訳はいわば両者の合作であり，amalgamation ともいうべきものであった。訳文は原文にきわめて忠実で，一語一句にいたるまで逐語訳といってよいものである。訳文にはボオドレールの英語の理解

力の不足を示す誤訳も往々にして見いだされはするものの，原文よりもニュアンスと暗示力に富んだ名文であったり，不手際な語句が修正されている場合も少なくない。彼の訳は今日も尚スタンダード版であり，N・R・Fのプレイアド版の訳本は版を重ね，ときに改訂されて版の絶えることがない。そしてまた「パリ評論」掲載の最初の評伝「エドガア・ポオ。その生涯と作品」(1852)，「意想外の物語」の序文となった同名の評論（1856）および，「新意想外の物語」の序文「エドガア・ポオについての新しい覚え書」*Notes nouvelles sur Edgar Poe*（1857）は，それ以後のフランスにおけるポオの批評や鑑賞の標準的な手引きとなり，彼がえがいたポオのイメージは今日も尚フランス人の心のなかに深く銘記されている。あまりにも自己の主観を投入しすぎたこのポオ論は，今日では大いに批判修正をうける余地のあるものだが，とも角ポオの研究史のなかで，英米圏の批評に対抗する一つの有力な伝統として今日まで存続しつづけてきた。

尚 1852年の「ポオ論」は，1856年の「ポオ論」ほどは巷間に知られていないものであるが，この二つの評論の内容にはかなりの相違が見られる。もっとも顕著な事柄の一つは初稿の「ポオ論」の第三章以下の作品論にあたる部分や，長すぎる作品からの引用が全部削除されていること，今一つは 1856 年の「ポオ論」で，Redfield 版「故エドガア・アラン・ポオ著作集」の編者 R. グリズウォルドのポオへの卑劣な中傷を非難し，＜衒学的吸血鬼＞ pédagogue-vampire とまで罵しっているにも拘らず，1852年版の「ポオ論」ではグリズウォルドに対する言及は一個所も見あたらない。もし彼が1852年までに，Redfield 版「著作集」を読んでいたら，なぜ最初の評論でグリズウォルドの背信行為に触れなかったのかという疑問がおこる。この点を指摘したのは，コナール版「ボオドレール全集」の註釈者ジャック・クレペ Jacques Crépet に外ならない。この点に着目したアメリカのボオドレール研究の権威バンディ教授 W. T. Bandy の調査によって，1852年版「ポオ論」の材源に関して新しい事実が判明した。約四十頁にわたる論文のうち，半ば以上が 1849 年及び 1850 年に「南方文学通信」*Southern Literary Messenger* に掲載されたポオに関する二つの評論[8] からの逐語訳であり，とくにポオの伝記的事実や，ポオの挙措容貌などの描写はほとんど原文そのままである。原文でポオを誹謗している部分は削除され，彼がかくあらせたいと願うポオ像へと修正が施こされている。またこれらの文章の間に挿入されている彼自身の文章の多くは，ポオの長所への擁護と，彼にたいして苛酷であった物質主義で俗悪な民主主義国への苛立たしげな嫌悪と軽蔑の情に色どられている。また，もっとも重要な第三章以下の作品論の部分は，ボオドレールが読んだと推定される Wiley and Putnam 版「作品集」(1845) に収録されている作品中の六つの作品，「こがね虫」，「モルグ街の殺人」，「催眠術の啓示」，「渦巻にのまれて」，「群集の人」，「黒猫」および，彼が1852年四月に訳を出した「ベレニス」をのぞいて，

論文中で，ボオドレールが言及しているいくつかの作品の批評内容は前記の記事から逐語的に借用されている。この1852年版「ポオ論」を書いた時点では，彼の伝記的な詳細について正確な資料を手に入れることが困難であったことは推測できるが，伝記では日附，年令，架空のギリシャ戦争への参加，ロシア遍歴などについて，彼が借用した記事と同じ誤まりを犯している。これらのことから，ボオドレールの伝記及び，オリジナルなものをのぞいたあとの批評は第二次的材源に依存したものであることは確かである。従って，従来信じられてきたように，1850年グリズウオルドの編纂した Redfield 版「著作集」に依拠して書かれたものではなく，この著作集をそのときまでに入手していたかどうかも疑問となってくる。この初稿「ポオ論」で，ボオドレールはポオの作品集として，「怪奇と幻想の物語」*Tales of the Grotesque and Arabesque* と Wiley and Putnam 版「作品集」の二つだけをあげているが，もし Redfield 版「著作集」を知っていたなら何故それに言及していないのであろうか。もし1852年までにこの「著作集」を読んでいなかったと仮定すれば，彼が同年の初稿「ポオ論」でグリズウォルドの背信行為に一言もふれていないことの説明がつくわけである。

ボオドレールは1858年には「ゴードン・ピムの冒険」を，1863年に「ユーレカ」を，1865年には第三の作品集 *Les Histoires grotesques et sérieuses* を世に送った。1860年代，ゴーティエを創始者とする高踏派の文学運動は全盛期に達していた。ルコント・ド・リール Leconte de Lisle，テオドール・ド・バンヴィル Théodore de Banville，カチュル・マンデス Catulle Mandès，シュリ・プリュドム Sully Prudhomme，ヴェルレーヌ Verlaine，ヴィリエ・ド・リラダン Villiers de l'Isle Adam，フランソワ・コペー François Coppée 等，高踏派の傘下に集まった詩人たちは，芸術自身のための芸術，知的創造としての芸術，情熱の排除と観念の統一，知性と技術の結合による完璧な仕上げ等という彼らの美学の先蹤者をポオのなかにみ出した。1866年に第一次「現代高踏詩集」*Le Parnasse Contemporain* が発刊されたとき，ボオドレールはすでに第三の作品集を発表していたが，このなかには「大鴉」及び「創作の哲学」を訳出した *La Genèse d'un poème* が含まれており，当時の文人たちが英語に十分通暁していなくても，翻訳をとおしてポオの文学理念に接することができたことは明らかである。彼らの会合ではしばしばポオの作品や詩論が重要な話題となり，彼らにとってそれらは新鮮な驚きと興味の源泉となった。ボオドレール自身が，「詩の原理」や「創作の哲学」等に示されたポオの文学理念にいかに共鳴し，文字通りこれを自己薬籠中のものとしたかは，彼の「エドガア・ポオについての新しい覚え書」を読むだけでも十分である。彼は「詩の原理」は訳さなかったが，この論文のもっとも独創的な主張を，「創作の哲学」中の所見や，「二度物語」*Twice-Told Tales* 評のなかの短篇小説論をも組み合わせ

てその大要を紹介する，というよりもほとんど自分自身の主張としてポオを代弁しているといった方がよかろう。この部分は詩の長さ，教化の邪説，情緒の排除，想像力の機能，分析的理性の役割，詩のための詩の主張，効果の統一，詩の音楽性等，フランスの象徴詩ひいては近代詩の根本原理となる大切な問題をとりあげている。ボオドレールは，1859年の「テオフィル・ゴーチェ」論のなかでは「覚え書」中のもっとも骨子となる個所を自分の文章として引用している。この部分は「覚え書」と同様，用語，文章表現までポオの「詩の原理」の翻訳といってもよいものであり，従来しばしば問題として取り上げられ，ヴァレリーさえ，控え目ながら剽窃の事実をみとめている。あれほど剽窃にたいして手きびしかったポオがこの文章を読んでいたら，どうなっていたであろうか。ボオドレールは「詩の原理」からあまりにも強烈な啓示を受けたため，もはや自他の思想を引きはなすことが出来ぬほど自己を侵蝕され，思想内容のみならず，形式まで自分のものとせずにおれなかったのであろう。次の言葉はそれを裏づけている。

> 人は私がポオを真似ているといって非難します。私がこんなに根気よくポオを翻訳する理由がおわかりでしょうか。彼が私に似ているからなのです。初めて彼の書物の一冊を明けたとき，私が夢想していた題目のみならず，前から考えていた文章を，彼が二十年前に書いていたことを発見して，私は驚喜したのです。[9]

しかし，このような完璧な自己投入があってこそ，ボオドレールはポオの名を不朽にすることができたのだから，ポオももって瞑すべしであろう。

ボオドレールのポオへの関心は詩よりもむしろ物語と文学理論に向けられていて，短篇七十一篇のうち四十三篇と，「ゴードン・ピムの冒険」を訳したが，詩は「意想外の物語」の冒頭に掲げられた「わが母へ」*A ma mère*,「リジェイア」中の「征服虫」，「アッシャア館」中の「幽霊宮」および「大鴉」（散文訳）の四篇にとどまった。

詩の分野でボオドレールがなし遂げなかったことを受けついだのは，マラルメである。彼もボオドレールと同様，ポオを知ってから英語の学習にいそしんだ。彼は二十才の時（1862）英国にわたったが，その目的は "Simplement pour mieux lire Poe" であり，彼の詩の翻訳をすることであった。彼は1875年にはじめてのポオの翻訳本「大鴉」*Le Corbeau* を出版し，さらに1888年には「エドガア・ポオ詩集」*Les Poèmes d'Edgar Poe* を公けにした。これがマネの挿絵数葉を入れた大型豪華本で，フランスにおける記念すべきポオの出版物であった。このなかには「大鴉」以下二十篇の詩が含まれている。訳文は韻律ゆたかな散文体であり，ポオの意図した詩的効果，韻やリズム，反復やパラレリズムの駆使がもたらす原詩の精妙な美が十分生かされていない点は遺憾である。とはいえマラルメの訳詩はフランスの詩人や，詩の愛好家にもてはやされて，ポオの声価を一そう決定的なものにした。このことは

如上の詩的形式をとりのぞいたあとも，ポオの詩の独特な内在的価値の伝達が可能であったことの証左ともなるであろう。マラルメの後，ポオの詩の完訳は，翌 1889 年 Mourey による *Poèmes complets*, 1908 年 Victor Orban による *Poèmes complets*, 1910 年 John Ingram の書簡を附した Mourey の *Poésies complètes*, さらにやや時を経て，1950 年 Léon Lemonnier による *Poèmes* があるのみである。

マラルメはボオドレールが訳した前記四篇の詩も訳しているが，それらの訳は彼独自の訳であり，ボオドレールの訳に依存している点は全くない。概してボオドレールが流暢さを狙っているのに対して，マラルメの訳の方がより正確といえよう。マラルメがポオから学んだものは，ボオドレールと同様，道徳や真理に奉仕しない，美を第一義の目的とする詩，選択と排除の厳密性による詩の純粋化，不明確さと暗示性の導入，韻文の必須条件としての調和と音楽，運動，色と匂いなどという象徴主義の本質的な諸条件であり，ポオの理論はボオドレールの理解と註釈をへて，より醇化洗練された象徴詩を生み出すための根本原理として，マラルメに奉仕している。「明敏の魔神，分析の天才，また論理と想像力，神秘性と計算という，こよなく斬新，こよなく心を惹く組み合わせの発明者，異例をめざす神秘家，芸術のあらゆる手段を探求し活用する文学の技師……」[10] とヴァレリーが評したポオの特質こそ，ポオがボオドレールやマラルメを魅してはなさなかったものであった。

マラルメは1875年，ポオの記念碑がボルティモアのウェストミンスター教会の敷地内に建てられたとき，ソネット「エドガア・ポオの墓」*Le Tombeau d'Edgar Poe* 一篇をフランスから贈って，ポオへの礼譲を示し，詩は開被式の式典で朗誦された。この詩はのちに「ステファヌ・マラルメ詩集」*Les Poésies de Stéphane Mallarmé* (1887) に再録され，さらに1888年の「エドガア・ポオ詩集」の巻頭に掲げられた。マラルメは，この詩の中で民主主義とドルの国アメリカで不遇の一生を終えた <poète maudit> のイメージをボオドレールから引き継いで，俗衆の言葉に純粋な意味をあたえた詩人を，酔狂の詩人としてかえりみなかった無知な世紀にたいして，詩人は死してのちその真髄をあらわして，覚醒をうながしている云々と，ポオへの敬意と擁護の心をこめてうたっているのである。

当時の高踏派，頽唐派，象徴派の詩人たちがワーグナーとともにポオを彼らの文学運動の守護神のごとくあがめたことは，これらの詩人，また画家や，音楽家や，歌謡作者が集まるモンマルトルの一画の有名なカフェが「黒猫」Le chat noir と名づけられて，1880 年代に殷盛をきわめていたこともポオ崇拝の一例となるであろう。しかし，ボオドレールとマラルメをのぞいては，彼らがポオを礼讃したのは，ボオドレールの「ポオ論」にならって，「ガス燈にかがやく蛮境」アメリカの犠牲となった悲運の天才詩人，神秘と怪奇の作家としてであって，冷徹な分析家，意識的制作の師匠であるポオの一面を十分に評価するものは少なか

ったようである。

ポオ礼讃は象徴主義の運動が不振となるにつれて次第に下火となったが，二十世紀に入って彼の名誉をふたたび更新したのはマラルメの高弟，ヴァレリーである。青年期のヴァレリーの思想に決定的な方向をあたえたのはレオナルド・ダ・ヴィンチとポオであった。彼の純粋詩の理念とその実践とは，ボオドレールとマラルメによる深い熟慮と錬達の時をへながら，ヴァレリーにうけつがれたポオの精神的遺産にほかならない。このことは彼自身がリュシアン・ファーブル Lucien Fabre の詩集「女神を識る」序言 *Avant-propos à la Connaissance de Déesse* の中でみとめている。

> 遂に十九世紀の中葉にあたって，フランス文学中に，「詩」をそれ自体以外のあらゆる本質から決定的に隔離しようとする，注目すべき意志の表示されるのが見られる。詩を純粋状態におくかかる準備は，既にエドガア・ポオによって，最大の明確さをもって予言され，提唱されたのであった。してみればボオドレールの中に，もはや詩そのもの以外には何も顧慮しない，あの完璧な試みが始まるのを見ても，異とするには当らない[11]。

ボオドレールが主として短篇小説の分野で，マラルメが詩の分野でポオの精神を継承したのにたいして，批評と理論においてポオを延長したのはヴァレリーであり，これら二人の先蹤者とポオとの内的関係を省察し，分析して，「同胞から異様に無視されている」このアングロ・サクソンの詩人がフランスの詩歌の伝統のなかに定着するにいたった系譜の必然性を示したのが，論文「ボオドレールの位置」*Situation de Baudelaire* である。

> ...Jamais le problème de la littérature n'avait été, jusqu'à Edgar Poe, examiné dans ses prémisses, réduit à un problème de psychologie, abordé au moyen d'une analyse où la logique et la mécanique des effets étaient délibérément employées. Pour la première fois, les rapports de l'œvre et du lecteur étaient élucidés et donnés comme les fondements positifs de l'art...[12]

> ...*Baudelaire, Edgar Poe échangent des valeurs.* Chacun d'eux donne à l'autre ce qu'il a; il en reçoit ce qu'il n'a pas. Celui-ci livre à celui-là tout un système de pensées neuves et profondes. Il l'éclaire, il le féconde, il détermine ses opinions sur une quantité de sujets: philosophie de la composition, théorie de l'artificiel, compréhension et condamnation du moderne, importance de l'exceptionnel et d'une certaine étrangeté, attitude aristocratique, mysticité, goût de l'élégance et de la précision, politique même...Tout Baudelaire en est imprégné, inspiré, approfondi.

Mais, en échange de ces biens, Baudelaire procure à la pensée de Poe une étendue infinie. Il la propose à l'avenir....[13]

Quant à Stéphane Mallarmé,...il a poursuivi dans leurs conséquences les plus subtiles les recherches formelles et techniques dont les analyses d'Edger Poe et les essais et les commentaires de Baudelaire lui avaient communiqué la passion et enseigné l'importance. Tandis que Verlaine et Rimbaud ont continué Baudelaire dans l'ordre du sentiment et de la sensation, Mallarmé l'a prolongé dans le domaine de la perfection et de la pureté poétique.[14]

ヴァレリーの純粋詩に関する主張や方法論が，ポオの詩論といかに根本的に合致するものであるかは，前者の様々な詩作に関する評論，「詩法」,「詩の必要」,「詩人の手帖」,「詩学叙説第一講」等を読めば明らかであるが，ヴァレリーが十八才のとき書いた，余り知られていない論文「文学の技術について」*Sur la technique littéraire* には，すでに彼の詩学の要点が示されており，彼が詩を書きはじめた頃からすでに詩作についての視点が定まっていたことが分る。そしてまた，青年のヴァレリーがいかにポオの「創作の哲学」に触発されたか，そしてポオの説く効果の力学的計量，選択と排除による素材の純化，構成の工夫，美的形式としての象徴の用法などの諸問題にいかに思いを潜めていたかを窺い知ることができる興味ふかい資料である。

*　　*　　*　　*

ボオドレール以後から現代までのフランスにおけるポオの批評と研究について，綜合的な文献書目は私の知る限りでは現われていないが，G. P. モリスの調査によると，1912年までに書かれた評論は四十七篇にのぼっている。

前述したように，ボオドレールとほぼ同時代の批評家たちは，詩人や物語作家がポオのなかに先駆者的な意義を感知して，これにあやかろうとしたのに対して，ポオを受け入れるのに必ずしも積極的ではなかった。翻訳家としても，批評家としても，ボオドレールはポオに関しては独裁者であり，独占企業家であって，誰も彼を凌ぐことはできなかったのだが，原作者ポオの真価，およびボオドレールの熱狂的なポオ支持に関しては，警戒や反感を表明するものも少なくなかった。当時の著名な批評家サントヴーヴ Ch. Sainte-Beuve は，ボオドレールの再三の懇請にもかかわらず，遂にポオの批評を書かなかったし，テーヌ H. Taine もポオの天分をみとめながら，恐らくはボオドレールが嫌いなために批評の筆をとらなかった。バルベイ・ドールヴィリ Barbey d'Aurevilly は前後四回ポオの批評をこころみているが，このカソリック信者で，堅固な王党員である批評家はボオドレールの意に反してポオ

を貶し，ボオドレールを非難する立場をとることとなる。彼は最初のうちは，ボオドレールが称揚してやまぬ未知のアメリカ作家に興味をひかれ，かつ彼の独創性，その想像力と分析能力の稀有な点をみとめたものの，第二次の翻訳「新意想外の物語」および「ゴードン・ピム」を読んでいたく失望した。彼はポオの個性を病的で奇矯なものときめつけ，作品には道徳性も人間的感情も欠如しているといって，訳者ボオドレールに恥をかかせるような無遠慮な批評を公けにした。

On se demande où, dans tout cela, se trouve la place de l'âme humaine. On ne trove que de la matière malade, anormale, désaccordée. Edgar Poe est un poète pathologique... Quoi, dans ces *Histoires Extraordinaires*... il n'y a rien de plus élevé, de plus profond et de plus beau en sentiment humain, que la curiosité et la peur, —ces deux choses vulgaires?[15]

当時の「良識派」の批評家であったドールヴィリは道徳主義をかかげて，ポオを不毛の美をあげつらう<ボヘミアンの王>le Roi des Bohemès にしかないと評し，ボオドレールの抗議にたいしても，次のように答えて彼の批評を取消す気のないことを宣言している。

Vous savez mes opinions littéraires sur Edgar Poe...Je ne me déjuge pas littérairement...Quant à mes opinions morales et non littéraires, vous savez ce que je suis. Du point de vue de cette moralité qui est pour moi le sommet du haut duquel il faut embrasser et juger la vie, J'ai regardé Edgar Poe. Je l'ai trouvé coupable, et je l'ai dit![16]

ドールヴィリの酷評が禍いして「ゴードン・ピム」の売れ行きははかばかしくなく，それ以後のポオへの評価は，マラルメによって更新されるまで下降の道をたどることとなった。

ブザンソン大学の教授であったルイ・エティエンヌ Louis Etienne は，1857年七月の *Revue Contemporaine* でポオを論じているが，彼もドールヴィリほど峻烈ではないにしても，ドールヴィリと同様，人道主義の観点に立ってポオの作品に否定的な評価しかあたえていない。彼はポオの作品に顕著な二つの特質，恐怖をひきおこす陰欝なゴシック的想像と，誇大な虚構に科学的真実性をあたえる才能をアメリカ的特質と見なし，すぐれた作品のなかでは，恐怖自体が詩であり，恐怖が迫真性をもって描かれるときポオは最高度に本領を発揮する。この点で，エティエンスは精妙な謎とき物語よりも，純想像的作品をより高く評価する。"Quand son talent mûri a su fondre ensemble la terreur et la vie réelle, ses contes sont des drames...Un genre de terrible qui touche presque au merveilleux, sans cesser d'être vraisemblable, là est, selon nous, le vrai mérite du conteur."[17] しかし，ポオの作品は道徳的情操と人間的心情を欠く故に，心に訴える力がなく，神経と頭

脳を刺激するのみである。とはいうもののエティエンヌは，ポオが人間性の底にひそむ根元悪を生得的なものとして，悪の衝動に身をゆだねる堕獄の魂と，良心の苛責をえがき出す非凡さに着目せざるをえず，ポオをアメリカのピューリタニズムに淵源をもちながら，信仰をぬきとられた宿命論者と見なしている。

エミール・エンヌカン Emile Hennequin はポオの短篇集 *Contes grotesques d'Edgar Poe* (1880) の訳者でもある，有力な批評家であったが，資料不足のため，他の大方の批評家と同様，ポオと酒神にみいられた奇矯の作家と見なしながら，彼の分析的理性を高く評価し，その精神能力は生活とは無関係に健全であったと考え，"De ses passions, de son alcoolisme, son inconstance, sa petitesse, sa pauvreté, son isolement, sa rage et son désespoire, l'intellectualité qui fut en lui suprême et non centrale, demeura séparée, intacte, triomphante."[18] と述べている。

シャルル・ド・モイ Charles de Moüy の評論 *La Revue française*[19] では，伝記的部分は，ボオドレールを踏襲するのみか，これをさらに伝説化して，ポオはヨーロッパ中を放浪し，ロシア，ギリシヤさては東洋まで流れ歩いた人物になっている。しかし，モイがポオはアメリカ人に理解されず不遇をかこった文人ではなく，むしろ流行作家として名声をかちえた人というべきで，彼の作品がアメリカの精神風土や，アメリカ的な性格を遺憾なく発揮していると考えている点で，悲劇的な立役者，美の殉教者としてのボオドレールのポオ像を修正している。彼が，ポオの作品の特質たる〝仮設にたいする情熱〟〝不可能なものの大胆な追求〟〝未知なものへの熱望〟などは一般的なアメリカ的特性であり，ポオは知的な領域において，開拓者の精神に通じる〝未知〟に挑戦する好奇心と勇気，物質主義に根ざした冷やかな計算性を示している。というのはともかくとして，ポオの好んで描くグロテスクな人物や超自然的な情景を，アメリカ人の異常なものへの趣味の表現であると説き，ポオの作品のなかに，未開の原野を拳銃をもってさまようアメリカ人の暴力と残忍性への好みを指適している点はいささか牽強附会の論であり，ボオドレールがアメリカを，芸術家を虐げ，窒息させる精神的牢獄として誇大に描いていると同様，モイのアメリカ像も，ポオと彼の精神的風土との結びつけ方も，図式的，観念的な感を免がれない。

二十世紀の初めに書かれた批評のなかで，着眼点の新しさで興味のふかいものに，ルミュ・ド・グールモンの意見がある[20]。彼は大方の評家がボオドレールの評伝にもとずいて，ポオを芸術家に苛酷な文化的未開国に生まれ，悲運の生涯を送った詩人という先入観に支配されているのにたいして，グールモンは持前の皮肉で，明快な警句の切れ味を示しながら，ボオドレールがポオにまとわせたパセティックな背光をはぎとって，現実家のポオ像に修正する。文学者にとって困難な条件はアメリカならずとも，フランスにしても全く同様で，ポオがフ

ランスに生まれた所で生計が楽にならなかったろうことは，ボオドレール，フローベール，ヴェルレーヌ，マラルメ，リラダンと同様である。また作家の生涯と作品の間に論理的な関係があるとは限らず，ポオの生涯もとり立てて異常なものではなく，芸術家であると同時に，慧眼な職業的作家でもあった。ボオドレールや，ドールヴィリが彼のことを＜病的な夢想家＞rêveur maladif というのは当らない。彼はむしろパスカルのいう＜幾何学的精神＞esprit geométrique にあたる明晳な知性の持主であり，ポオの場合，知性は想像力以上に重要な精神能力であると評し，ポオを先ず un grand esprit critique と定義している点で今日のポオの評価を先取りしている。第二の着眼点は，ポオは実生活のなかではよく運用しえなかったものの，実務家の素質にめぐまれた才人であったという見方である。ポオの大げさな宣伝癖，広告癖，ジャーナリズム的傾向はアメリカ特有の趣味であり，むしろエマーソンやホィットマン以上にアメリカ人であり，文学の分野以外では一流の実務家なのだ。こういうグールモンの意見は革新的で，ボオドレール以後の先人たちの考え及ばなかったことをずばりと言い切る小気味よさがある。グールモンのポオ批評は，十九世紀的，浪漫主義的な見方と訣別し，より主知的，客観的な観点に立って，ポオの近代性を抽き出して示している。ポオの雑誌記者，ジャーナリスティックな批評家としての活動が認識されつつある今日から見ても，グールモンの見方には現代のポオ評価を先取りした斬新さが感じられる。また彼がポオのなかに宿命観の存在を指適しているのはエティエンヌと同様だが，後者がこれをピューリタニズムの残照と見るのにたいして，前者はギリシャ的な運命観を背後に考えているらしい点に相違がある。さらにまた，グールモンが，ポオの作品のなかに，カソリシズムの匂いをかぎ取っているのは興味ふかく，私の知る限りでは，英米の批評家でこの点を指適した批評家は見当らなかったと思う。彼がそれをポオのアイルランド人の血統と，アメリカの南部の育ちに帰因するものと推量している点も示唆に富んでいて興味ふかい洞察である。彼のいうカソリシズムは，ボオドレールをはじめとするフランス人にアッピールしたポオの作品の潜在的要素なのかも知れない。

以上のようにボオドレール以後二十世紀の初めまでの批評家によるポオの評価を数例あげたが，概していえば，十九世紀後半のヨーロッパではアメリカ本国と同様に，グリズウォルドの“Memoir”がもっとも信憑すべき資料として通用していた時代で，伝記的事実の真偽がたしかめられぬままに，グリズウォルドの描く，素行のおさまらぬ銘酊の詩人，またボオドレールの描く所の美の使徒，ほこり高い貴族的個人主義者としてのポオ像は一そう神秘化され，伝説化されて伝えられ，ドールヴィリに＜ボヘミアンのバイロン＞と嘲笑されもしたのである。ボオドレールといえども，グリズウォルドの偽瞞性を彼一流の直観によって看破し

たにすぎず，フランス国内でもポオを良俗に反する，エクセントリックな作家として排斥し，あるいは黙殺するものも少なくはなかった。ドールヴィリや，エティエンヌの批評はその一二例にすぎない。そしてまたこれらの批評には，当時のフランス人のアメリカ観が反映しており，ボオドレールがドルと物質万能の巨大な産業主義国の犠牲となった芸術家としてポオを擁護したにも拘らず，批評家たちのなかには，ポオと彼らがいだくアメリカ及びアメリカ人のイメージを結びつけ，ポオのなかにアメリカ的性格を見ようとするものも少なくなかった。シャルル・ド・モイやグールモンはその例である。また，1856年に早くもポンマルタン Armand de Pontmartin は，ボオドレールの「ポオ論」に異議をとなえ，ポオはむしろアメリカの計算性を体現した作家であると考え，またポオの悲運をアメリカ社会の罪であるとして糾弾するボオドレールの説を反駁して，芸術家の不遇は古来何処の国にでも見られる現象で，ポオのアメリカも，ネルヴァルのフランスも，彼らの狂気にたいして責任はなく，彼らと社会との関係は現実と空想，想像と常識との間の永遠の斗争にほかならないと解釈している[21]。ボオドレールを踏襲しない批評家たちのポオのなかに見いだしたアメリカ的特性とはまず物質主義であり，科学にもとづく合理的精神であった。フランス人がアメリカ人の富と物質崇拝，産業万能主義に軽侮をいだいていることは今も昔も変らないが，この科学と物質主義から派生した実際性，功利性，合理性と計算の精神，「最少の手段を用いて最大の効果をもたらす」エコノミーの観念，技術と方法への関心などというアメリカ的特性が，想像力の領域に適用された場合の効果に驚嘆し，アメリカ人ポオのなかに，新しいタイプの人間と文学の登場を感知せざるをえなかったのである。

このようにして，フランスにおけるポオの評価はボオドレール以来二十世紀の初めまで，作家側の支持と，批評家による批判と反論との間を浮き沈みしながら約半世紀の歴史をたどったものと考えてもよく，ポオはボオドレールの紹介によって，一躍栄光の座にのぼりつめたのではないことを認識しなければならない。

（紙面の都合により，二十世紀以後の評価と研究については，後日，稿を改めて述べたいと思う）

註

1）Henry James, "Baudelaire," *French Poets and Novelists*, London, 1878.
2）T.S. Eliot, *From Poe to Valéry*, Harcourt, Brace and Co. New York, 1948. 19.
3）A. Huxley, "Vulgarity in Literature," in *Saturday Review*, Sept. 27, 1930.
4）Yvor Winters, "Edgar Allan Poe; A Crisis in the History of Obscurantism" in *In Defense of Reason*, Univ. of Denver Press, 1943. 259.
5）Perry Miller, "Europe's Faith in American Fiction," *Atlantic*, CLXXXVIII, December, 1951. 52-53.
6）T.S. Eliot, *From Poe to Valéry*, Harcourt, Brace and Co. New York, 1948. 7.
7）Emile-D. Forgues, "Études sur le roman anglais et américain," *Revue des Deux Mondes*,

XVI, Oct. 1, 1846. 343.
8) "Edgar Allan Poe," *Southern Literary Messenger*, March, 1850. John R. Thompson, "The Late Edgar A. Poe," Ibid., Nov. 1849. 前者は匿名批評だが，筆者は John M. Daniel であると知られている。
9) Ch. Baudelaire, Letter to Théophile Thoré, 1864.
10) Paul Valéry, "Situation de Baudelaire," *Variété* II, Gallimard, 1930. 125.
11) *Variété*, 95.
12) *Variété*, II. 136.
13) Ibid., 137-138.
14) Ibid., 147.
15) Barbey d'Aurevilly, *Les Œuvres et les Hommes, XIX siècle, Littérature étrangère*, Lemerre, Paris, 1890. 370-382.
16) Letter to Baudelaire, May 14, 1858.
17) Louis Etienne, "Les conteurs américains—Edgar Allan Poe," *Revue contemporaine*, XXXII, July 15, 1857.
18) Emile Hennequin, *Écrivains francisés*, Paris, 1889. 161.
19) Charles de Moüy, "Études contemporaines; XX, Edgar Poe," *Revue française*, VI, Oct. 1, 1863. 145-158.
20) Remy de Gourmont, *Promnades littéraires*, Paris, 1904. 348-382.
21) Armand de Pontmartin, "Causeries littéraires," *L'Assemblée nationale*, April 12, 1856.

（附記：本稿は，1968年度比較文化研究所休暇研究による研究成果の一部である。）